

大徳寺派「入室行巻」について

飯塚 大展

はじめに

林下大徳寺派下の教学の体系は、応仁文明乱前後に形成されたと推定されている。一休宗純の『自戒集』には、康正元年ノ秋ノ末、養叟、泉ノ堺ニ、新菴ヲ建立ス。菴号ヲ、陽春菴ト云。異名ヲ、養叟ノ入室屋ト云。同十二月ニ堺ヘ下向アリテ、安座・點眼、菴ヒラキニ、五種行ヲ行フ。

一ニハ入室、一ニハ垂示・着語、一ニハ臨濟録ノ談義、一ニハ參禪、一ニハ人ニ得法ヲオシウ。
ソノヘンノ狂客、無住榜ヲツカマツリ候。ソノ無住榜ニ云。

一休が、法兄の養叟宗頤を批判する語としてよく知られているものであるが、入室・參禪・得法は、当時既に、学人(弟子)が師家について、公案を参じて境界を高め、悟りを得るといふ一定の修行形態として成立していたと思われる。一休は、法兄の養叟宗頤及び会下の人々が俗人に入室・參禪・得法を許し、安易に印可を認め、その見返りに金錢を求め、ある方を容認しなかつた。従つて、堺陽春庵における活動を批判して、彼らを仏法を世渡りの道具とする「榮街徒」であると批判している。『自戒集』の記事は、内容の荒唐無稽さは否定できないが、その落書、狂詩という性格を理解した上で利用するならば、きわめて示唆に富むものである。

室町時代後期には、仏事関係法語の増大が顕著であり、禅僧の語録の質的变化が見られる。確かにいわゆる葬祭関係の仏事法語は、語録に占める比率は高いと言える。しかし、そこには、語録の編纂方針が大きく影響している。実は入室勘辨・垂示の記録が排除されているのであり、当然ながら密参の記事も見出すことはできない。公案参究の側面が欠落しているのである。私見によれば、大徳寺派において〈語録抄〉と〈密参録〉は相互補完的關係にあり、そして師資

相伝を前提とし秘密伝授される（密参録）は大悟の証明（印可）に直接的に結びつくものであった。

1、「垂示」ヨロソム

室町時代後期以降、林下大徳寺派においては入室参禅が盛んに行なわれ、五山叢林とは異なる宗風を有していたと考えられる。かつて私は、「垂示」の書名を持つ史料に関心を抱き、東京大学国語研究室所蔵の『大圓禪師垂示夜話』を紹介したことがある。⁽¹⁾「大圓禪師」とは、大徳寺七十二世東溪宗牧（一四五四～一五一七、永正二年～一五〇五）大徳寺入寺）を指して言う。⁽²⁾ 聞書の抄者は、表紙並びに巻末の記事に拠れば、後の大徳寺第九十三世清菴宗胃（一四八四～一五六二、正受院開祖、廣徳正宗禪師）とする。巻末に本書の筆写者が清菴宗胃であるとの跋を書いているのは、大徳寺第二百八十九世亭山紹云（一六六五～一七四三）である。東溪には、『佛慧大圓禪師語録』三巻があり、眞珠庵蔵の三巻三冊本が『大徳寺禪語録集成』第四巻に影印されている。⁽³⁾

東溪以前の養叟宗頤・春浦宗熙・實傳等の語録には、垂示はその編纂の際に除外されているが、東溪宗牧の語録には、垂示の部立て「室中語要」が存在する。『大圓禪師垂示夜話』は、『東溪語録』室中語要下にほぼ相応し、東溪の垂示に対して、注釈（弁）を付する点でも貴重な史料である。そこには、華叟宗曇・養叟・春浦・実伝・東海宗朝らの垂示・下語が取り上げられており、垂示は節季や祖師の忌日、俗人の供養（斎食）をはじめ、様々な機会に行われていたことがわかる。また師家が垂示に用いた公案に対する代語、下語が、後にその弟子や参学者によって再び取り上げられ、再吟味されることもあった。⁽⁴⁾

又、北派の祖である古岳宗互の著作『大徳寺夜話』には、一休宗純や養叟宗頤の垂示下語、代語の記事が見られるが、更に溯って大徳寺開山大燈国師、同寺一世徹翁義亨の頃より、垂示が行われていたと思われる。例えば、養叟宗頤の語録は、その大部分が散佚しており、その全体を現時点では見ることができない。『大照禪師語録』（養叟の語録）の奥書には

○大照禪師者、天澤的流、而龍峯中興之活祖也。室中語要亦夥矣。吁、世乱道微兵燹不熄。埼失厥本録、不能聽全機。今幸點檢殘纒得一二、以為語録。庶幾千歳于雲補其缺略而已。

于時元祿乙卯季秋日、焚香拜書。

劣孫 宗沅 印 印

とあり、養叟にも現存していないが多くの「室中語要」が存在し、垂示が頻々として行われていたことがわかる。このことは、前掲の『自戒集』の記事とも符合する。

二、「入室」について

『自戒集』に拠れば、「入室」と「參禪」は、別のこととして記されているが、管見においては、両者の区別が判然としない。又、先に言及した「垂示」との関係性も明らかではない。永源寺所蔵「徹翁和尚入室語」には、貞治六年（二二六七）十二月十三日室町幕府第二代將軍義詮初七日法要から始まり、大練忌法要（四十九日忌）に至る、七日毎に行つた徹翁義亨と会下の僧達による「入室」語が以下のように記録されている。

貞治第六臘月十三日、為特進亞相征夷大將軍「宝篋院殿瑞山權公初七入室。徹翁和尚。」

挙、臨濟上堂云、一人在孤峰頂上、無出身路、一人在「十字街頭無向背、那个是在前、那个是在後、不作維摩」詰、不作傳大士、意旨如何。」

一僧云、疑殺天下人。禎」

一僧云、作賊人心虛。師云、好語不喫棒。僧云、謹謝。師「証明。石。」

一僧云、指柳樹罵槐樹。幢。」

一僧云、蛇入竹筒。筒。蔡。」

一僧云、爛泥裡有棘。湛。」

一僧云、這賊。智。」

一僧云、巡人犯夜。範。」

一僧云、懸羊頭賣狗肉。覺。」

同二七日

挙、僧問岩頭、古帆未掛時如何。頭云、小魚吞大魚。僧「又問、掛後如何。頭云、後園驢喫艸、意旨如何。」

一、長鯨碾月珊瑚枝、鸞舞鸞風玻璃鏡。 豊干騎底大「蟲、元是南山白額。禎。」

- 一、火裡酌清泉。 七九六十三。 湛。」
- 一、不免拖泥帶水。 截斷紅塵水一溪、衝開碧落」松千尺。 喜。」
- 一、寸長尺短。 前三々後三々。」
- 一、雲在領頭閑不徹、水流澗下太忙生。 蔡。」
- 一、昨夜金烏飛入海、曉天依旧一輪紅。 越。」
- 一、破鏡不重照。 裂破。打云、前語不助後語。 具。」
- 一、兔馬有角。 牛羊無角。 照。」
- 一、皈依佛法僧。 六々三十六。 守。」
- 一、頂上無骨、領下有鬚。 同坑無異土。 智。」
- 一、六月紛々雪下。 耳朵兩片皮禪。 範。」
- 一、頂上無骨、領下有鬚。 兩々三々。 覺。」
- 同三七日 古帆話。」
- 一、捨明珠弄魚目。 將錯就錯。 禎。」
- 一、被毛入火聚。 九々八十一。 石。」
- 一、大尺三十日、小尺二十九日。 打云、半片道德。 幢。」
- 一、白馬入芦花、彩鳳舞丹霄。 師云、半片道德、半片不是。 喜。」
- 一、向北看南斗、意旨如何、向南看北斗。 師云、能受用」始得。 富。」
- 一、大底大小底小。 一彩兩賽、意旨如何。 前三々後」三々。」
- 一、虎体元斑、有理無利。 不離行市。 桂。」
- 一、兔角杖龜毛拂。 水河生焰、鉄樹抽枝、意旨如何。」万里一条鉄。打云、不是。 守。」
- 一、雨中看杲日。 泥團土塊。 智。」
- 一、去却一拈得七。 山上鳥海底魚、意旨如何。 九々」元來八十一。 範。」
- 一、橋流水不流、人從橋上過。 七九六十三。 覺。」

同四七日 古帆話。

一、小魚吞大魚。大魚大小魚小。打云、知行履。禎。」

一、眼裡瞳人面前人。九々八十一。蔡。」

一、指東答西、指西答東、畢竟如何。泥牛吼月。師云、何不道、木馬嘶風。僧擬議。打云、去々。利。」

一、赤肉白骨、被毛入火聚。師云、小魚吞大魚、与後「園驢々喫艸、是一是二。七九六十三。智。」

一、土面灰頭、灰頭土面、畢竟如何。七九六十三。佐。」

一、狂狗逐塊、師子咬人。三々九。狂狗——師子——、畢竟如何。耳朵兩片皮——骨。用。」

一、鉄船上浮、意旨如何。閑葛藤。覺。」

同五七日

瀧山示衆云、有句無句、如藤倚木、意旨如何。」

一、上無攀仰、下絶己躬。打云、不是々々。禎。」

一、作賊人心虚。石。」

一、眼看東南、心在西北。湛。」

一、碍人荆棘長無根。喜。」

一、耕地種蒺藜。曲心不少。蔡。」

一、懸羊頭賣狗肉。謾人不少。佐。」

一、漏逗不少。師云、漏逗个什麼。擬議。打云、不是。言。」

一、扶桑夜半日頭明、勘破了也。師云、勘破个什麼。僧云、瀧山謾却人。師云、那裡是他謾人处。僧云、也是和」

尚謾人。打云、非是汝語。」

一、虎斑易見、人斑難見。師云、什麼人斑。僧、也是禾上」不少。師打。非汝語。」

一、喚鐘為甕、意旨如何。曲不藏。打云、不是々々。瑞。」

同六七日

龐居士問馬大師云、不与萬法為侶者、什麼人。大師云、待汝一口吸尽西江水、却向汝道、意旨如何。」

一、因。逢著渠。泥牛吼月、破澄潭月。禎。」

一、負背戴胸。和氣吐露了也。師云、吐露底、響。僧云、「一言已出、馬難追。（難追カ）師打云、一句合頭語、萬劫繫」驢橛。石。」

一、上破天下穿地、一句道着。幢。」

一、大坐宇宙。彩鳳舞丹霄。湛。」

一、充塞六合。三脚蝦蟆跳上天。打云、能受用始得。和。」

一、上拄天下拄地。鉄船水上浮。蔡。」

一、觀面相呈。恩大難酌。師云、難酌底、響。僧云、萬里」一条鉄。師打云、不是々々。」
同七々日」

滄山示衆云、有句無句、（無観カ）藤倚木、意旨如何。疎山云、「樹倒藤枯、句飯何処、意旨如何。」

一、荆棘林裡一条古路。只知事從（遠カ）眼前過、不覺老從」頭上來。師乃打。禎。」

一、這賊。不知明珠、還作瓦礫。石。」

一、曲不藏直。（隠カ）當面差過。湛。」

一、鉄蒺藜。意旨如何。曲湾々。打云、能受用始」得提、曲心已露。貪看天上月、失却掌中珠。越。」

一、揭薩阿勞。謾人不生。」

一、也逐流鶯過短牆。」

一、指槐樹罵柳樹。只見錐頭利、不知鑿頭方。師」打云、非汝語。覺。」

入室語としては、古い成立と言える。忌日法要において行われた法問の記録が、「入室」の一つの特徴である。織田信長の卒哭忌に因む、玉甫紹琮の「入室語」が残されており、多くの僧との問答が記録されている。高桐院所蔵「玉甫紹琮」入室」《大徳寺墨蹟全集》第二巻所収）の冒頭部分を以下に掲げる。

師一手拈竹篋、一手擒住首座曰、這黑蜥蛇、昨夜現大人相、向山僧道、壬午之秋九月十一日、廻捻見院殿贈大相國一品泰巖大居士卒哭忌之辰也。展於令月、功德主、就當寺、啓建道場、唯願為大居士、請入室勘弁、以資助化儀某甲侍立。山僧日口領衆不分之間、何況」吾祖門下、本無一法可舉揚。雖恁麼、明日」人天衆前拈旧話端、順人情

而已。大人珍重、而便帰掌握。師問、記得龐蘊居士問江西馬祖大師云、不與萬法為侶者、是什麼人。請首座「下一轉語看。座云、大居士特地震威雄來、一劍定」天下。師曰、如何是定底天下。座云、安住不動、如須弥山。師曰、大師曰、待你一口吸尽西江水來、便「向你道、意旨作麼生。座云、解道馬祖如春。」師曰、既是馬祖為什麼如春。座云、十月梅花」新吐蕊。師打曰、儼陳尊宿風規。洞

一僧云、國王瞻之、大臣仰之。師曰、意旨如何。僧云、「普天下只一人。師打曰、老倒疎慵無事日、安眠高」臥對青山。綱（下略）

時の権力者の忌日に行われる法問は、儀礼的性格を有すると思われる。大徳寺の塔頭龍光院には、春浦宗熙の入室勘辨の記録が残されており、大徳寺百九十六世傳外宗左による「春浦和尚真蹟」との跋が付されている。そこには、「永享十二年冬節廿日、就大用庵入室」から、「因明室光公禪定尼三十三回忌入室、宝徳二年九月廿一日」に至る入室勘辨を見ることのできる。同じく入室勘辨の史料としては、笑嶺宗訢の入室勘辨を侍者仙嶽宗洞が記録したものが現存する。林下曹洞宗道元派下においても、入室勘辨が行われており、その記録として『耕雲傑堂和尚之入室』が現存する。江戸時代初期においても、入室參禪が行われており、例えば国立公文書館所蔵『大徳寺入室行記』（江月宗沅勘辨、元和三年宗規写）等がある。

三、「大徳寺入室行巻」について

大徳寺の伝記は、内閣文庫所蔵『統群書類従』「竜興山南宗禪寺開山前住大徳特賜正覚普通国師大徳和尚塔銘」に詳しい。この塔銘は、武野紹鷗の嫡孫宗朝の発願により、南禪寺（第二百七十四世）の僧録司最嶽元良（一六五七）がその文を作成し、前禪興寺竺隱崇五が碑文を書写し、天龍寺の補中等修の篆額を付して、承応二年十二月に完成している。これによれば、大徳寺（一四八〇～一五六八）、はじめ惟春寿桃と称し、天竜寺天源庵の肅元寿嚴に師事する。五山派から林下大徳寺派に移り、東溪宗牧・玉英宗岡に参じた後、古岳宗旦に師事してその法を嗣いだ。享祿五年七月大徳寺の号を授与せられており、古嶽和尚筆「大徳寺」が現存する。徳禪寺に住して後、天文五年（一五三六）二月、後奈良天皇の綸旨を得て大徳寺第九十世住持となり、同十年本山の塔頭大仙院の西隣に裁松軒を建ててこれに在住した。三好長慶は深く大徳寺に帰依し、弘治二年（一五五六）父元長のために南宗菴を改めて南宗寺とし、開山に請している。

永祿年中、松永久秀は夫人勝善院殿仙溪宗壽追善の為に山内に勝善院と建て、大林をその開山とした。長慶の諸弟もまた大林に帰依しており、三好実休、十河一存、安宅冬康及びその一族は、入室参禅している。さらに堺の豪商の帰依もまた厚く、阿佐井野宗瑞、武野紹鷗、同信久、同為久、津田宗及、北向道陳、谷宗臨等が参禅している。嗣法の弟子に笑嶺宗訢、惟清宗泉がいる。

因みに大林は、大永五年（一五二五）五月、古嶽が宗安禅人の為に行った「入室勘辨」に際して侍者となり、古嶽と「南泉斬猫」の話を問答し、師資相応して印可を与へられている。

以下に、大林の入室参禅の一端を示すと思われる、架蔵の「大林宗套入室行巻」（近代改装、卷子装、一卷）を紹介したい。

永正二年二月全堂

昨問之龍龜居士詞馬夫所不字乃法為從者

乞竹火請首序下轉讀看

塵云泥未干以東至今不愛呼嗚呼况不

並風塵所云水洒不着風吹不入

嗚呼大呼春待你口吸春西江水向條道長

香如 塵弓繁羅帳雲如撒真珠塔傍空

一偈云在相尚香乳 呼云香如塔傍燒之

燈之 呼法乎

也

一偈云等坐見手掛在面前 呼掛在胸前

隱名你頭 呼名顯后作生 呼名明如日

一偈云突出相尚雨前 呼名况矣出屋

一偈云浦室堆席 呼法乎

一偈云隨處為主 呼云為元主 呼通界曾不究

一偈云呼法乎

一偈云十五夜界夜生外 呼一麟兒主 呼

一得三祖也为主心为王流通界看不足
 一得三十二走界取主心一麟立主
 一得此言天升看誰气我般人得者看
 一得三三下唯我独了得了倒
 一得等此然之忽然突出脚脚得突出
 一得如何得言突出脚脚得如何
 一得坐勘與盧頂上得坐斷巨骨得坐
 一得二人一唱一和得了也
 一得展堂三這夜光珠得如何是夜珠
 一得三三也向了之呼三于後得信
 一得三味得信
 一得燈籠法智上天也得上後得信
 一得三聖是法跡得如何之各跡得天地
 一得三黑得信
 一得認這眼一頭在野前馬後得信
 一得在後得信法尊之孤圓三這少慧
 一得三宇水刺也似血盆得志者得信
 一得迎衛得信

大徳寺派入室行巻02

一 佛認通眼、吳、泥、杜、野、前、馬、後、呼、回、聲
 在、後、何、信、流、尊、之、孤、回、之、還、少、幾
 一 得、于、如、劍、樹、之、似、血、盆、喝、者、為、信、言
 一 難、進、倚、傍、呼、信、言
 一 一、道、貫、十、方、當、如、之、通、空、處、信、先、處、回、瓶
 呼、信、言
 一 一、撞、天、摧、地、呼、信、言
 一 一、元、年、不、托、足、為、存、一、天、信、暗、層、
 十、寸
 呼、信、言
 一 一、擊、山、隨、海、呼、者、為、信、拋、面、前
 呼、信、言
 一 一、黑、湯、呼、信、言
 一 一、海、位、不、動、須、志、山、呼、者、為、信、情、
 呼、信、言
 一 一、救、迷、走、于、車、之、呼、者、為、信、移、大、登、心
 呼、信、言

敬 秋遊寺車之呼名号於 秘三卷
 温 呼係し
 一 巨之充塞美地 呼名号於 作于南新
 大味 呼係し
 一 運達廉留今遊技業 呼名号於 後の係
 大方 外皆充塞
 呼白大呼答待你一吸卷至江水即向道
 老号為 係織成古錦會春像元
 奈東君 隔泄の 呼名号於 之啓祥更物
 咸新 不是形牙歌仕之 侍去道着
 流術 彩一賽 呼名号於 元一賽 呼名号於 明強
 呼係し
 一 和元年二紀 呼名号於 元丑之歲
 大
 昔通玉卿一 呼名号於 秘三卷
 至五部
 至五部

【資料（一） 架蔵「大林宗套入室行卷」】

永正二年丑月入室

師問曰、龐蘊居士問馬大師、不与万法為侶者、是什麼人、請首座、下一轉語看。」

座云、天地未分以來、至今不變。師曰、如何是不」變底。座云、水洒不着、風吹不入。」

師曰、大師答曰、待你一口吸尽西江水、即向你道、意」旨如何。座云、紫羅帳裏撒真珠。師便打。全。」

一僧云、在和尚舌頭。師云、意旨如何。僧云、焯々」焯々。師便打。溪」

一僧、拳坐具云、下在前面。師曰、掛底、響。」隱而彌顯。師曰、頭底作麼生。僧云、明如日。悉。」

一僧云、突出和尚面前。師云、如何是突出底。」僧云、滿室堆席。師便打。寅」

一僧云、随处為主。師云、如何是主。僧云、徧界曾不蔵。」師便打。通」

一僧云、十方世界現全身。師打曰、一麟足矣。麟」

一僧云、出頭天外看、誰是我般人。師曰、如何看。」僧云、天上天下唯我独尊。師便打。漸」

一僧云、拳袈裟云、忽然突出袈裟角。師曰、突出」後如何。僧云、突出難辨。師便打。淵」

一僧云、坐断毘盧頂上。師曰、坐断底、響。僧云、遂呈」大人之相。喝一喝。師便打。怒」

一僧展掌云、這夜光珠。師曰、如何是夜光珠。」僧云、呈和尚了也。師曰、呈了後如何。僧云、」明皓々。師便打。

榮。」

一僧云、燈籠沿壁上天台。師曰、上後如何。僧云、」千聖覓無跡。僧云、天地」黒。師便打。一」

一僧云、認這昭々靈々、落在驢前馬後。師曰、落在」後如何。僧云、活卓々孤迥々。師便打。贊」

一僧云、牙如劍樹、口似血盆。師曰、意旨如何。僧云、」難近傍。師便打。越」

一僧云、通貫十方。師曰、如何是通貫底。僧云、無處回避。」師便打。德」

一僧云、撐天拄地。師便打。玲」

一僧云、元来不相見。師曰、為什麼不見。僧云、暗昏々。」師便打。等」

一僧云、擎山涵海。師曰、意旨如何。僧云、抛向面前。」師便打。榮」

一僧云、黒漫々。師便打。真」

一僧云、安住不動、如須弥山。師曰、意旨如何。僧云、煒々、煌々、巍々堂々。師便打。運。」

一僧云、釈迦老子来也。師曰、意旨如何。禪云、大地黒」漫々。師便打。

一官人云、充塞天地。師曰、意旨如何。官云、當軒」大坐。活」打落スニコト。堅。」

一僧云、達磨即今遊扶桑。師曰、遊後如何。僧云」大方之外皆充塞。」

師曰、大師答曰、待你一口吸尽西江水、即向你道、」意旨如何。僧云、織成古錦含春像、无」柰東君漏泄何。師曰、元正啓祚、萬物」咸新、不是新年頭佛法麼、侍者道看。」僧云、兩賽一彩。師曰、如何是一賽。僧云、明皓々。」師便打。亘。」

永正第二龍口乙丑歲」

右

普通國師之真跡也。

註

(1) 拙稿「禪籍抄物研究(二)——『大圓禪師垂示夜話』を中心として——」、『駒澤大學佛教學部研究紀要』第六二號

二〇〇四・三)

同 右「禪籍抄物研究(六) 駒澤大學図書館蔵『大圓禪師夜話』について」、『駒澤大學禪研究所年報』第二二號、二〇〇九・三)

『大圓禪師垂示夜話』 写本1冊 書写年 不明(永正年間) 楮紙 縦23・5糎、横14・5糎 袋綴 外題 左肩打ち付

墨書「大圓禪師垂示夜話」 墨付き41丁(表紙1丁) 無辺無界 每半葉11行、毎行23〜30字 書写者 清菴宗胃 識

語等「大圓禪師垂示夜話(永正年中清菴意藏主時間書也)／不容他見／卜雲老拙／主宗詮」「右正宗禪師墨痕／享保二丁

西年七月晦日／紹云證焉」 請求番号 22A-103、文 3973

この本のつれと思われるものに駒澤大學図書館所蔵『大圓禪師夜話』がある。

写本一冊 書写年 不明(永正年間) 楮紙 縦22・3糎、横14・2糎 袋綴じ 外題 左肩題簽「龍源夜話」(墨書)

大徳寺派「入室行卷」について(飯塚)

墨付き 22丁（原表紙1丁） 無辺無界 每半葉11行 毎行23〜24字 識語等「不容他見 ト雲老拙 宗詮 大圓禪師夜話 永年中清菴和尚意蔵主時開書也」「右正宗禪師墨痕 享保二丁酉年七月晦日／紹云證焉」

(2) 東溪宗牧は初め養叟宗頤の法嗣春浦宗熙に参ずること十年に及び、春浦はその遷化に臨んで宗牧の後事を弟子の實傳宗真に託している。後に宗牧は實傳の法を嗣ぎ、東溪の号——既に春浦により鍊牛の号を得ていたのだが——を得ている。また永正九年（一五一一）には後柏原院より「佛慧大圓禪師」の号を贈られている。大徳寺に龍源院を創建し、外に大雲寺（近江国高島郡）や中興寺（同国蒲生郡）、正法寺（伊勢国鈴鹿山）等を開創している。

(3) 平野宗浄氏は、解題の中で以下のように記されている。『大圓禪師語録』三冊。『東溪宗牧禪師語録』略して『東溪語録』ともいう。今回の影印には眞珠庵蔵の写本を使用した。この語録の特色は第一巻から第二巻にかけての「室中語要」と「入室勘辨」とにある。この「室中語要」とは、その名を『雲門広録』から採ったと思われるが、内容も『雲門広録』を意識しており、復古の意気が感じられる。そして題材も唐代禪語録のみならず、大徳寺世代の祖師達の語を多く用い、他の語録に見られぬ貴重な資料ともなっている。「入室勘辨」というのは東溪とその弟子達との問答を記録したもので、こういう「勘辨」というのは、徹翁以後これが唯一のものであろう。さすがに大徳寺南派の派祖の語録だけあって、その独自性は他の追隨を許さない。

(4) 堀川貴司「垂示（江隠宗頤） 解題と翻刻」（『花園大学国際禅学研究所』第四号、二〇〇九・三）

垂示は、独立した一書として記録されることもあり、黄梅院蔵『垂示 宗九和尚・清庵和尚』（徹岫宗九（一四八〇）一五五六）、清庵宗胃（一四八四）一五六二）垂示、「笑嶺和尚垂示一問」（大徳寺第一〇七世笑嶺宗訢（一五八三）「垂示」、大徳寺第二百二世江隠宗頤（一五六一）『江隠菴』所載）『垂示 玉仲和尚』（大徳寺第二百二世玉仲宗瑋（一五二二）一六〇四）垂示、「玉室垂示」（大徳寺第四百四十七世玉室宗珀（一五七二）一六一四）垂示、芳春院蔵『心源禪師諸稿新考』所載）、松ヶ岡文庫蔵『黒漫々』（和溪宗順（一四九六）一五七六）聞書、正徳二年書写）、同蔵『龍嶽和尚葛藤』（大徳寺第四百六十四世龍嶽宗劉（一六二六）垂示、自筆本と近代写本の二種）等が現存する。